

Retro-Future

古くて新しい もうひとつのヴィンテージオーディオ

ヴィンテージといえば、アルテックやタンノイなどが誌面に取り上げられる機会が多い。しかし、当時これらの老舗と肩を並べる、他の多くのブランドがあったことを知る人は少ないだろう。ビンテージ・ショップ「アトリエJe-tee」では、音質はもちろん、デザインにもこだわった「もうひとつのヴィンテージ」を数多く紹介している。本企画では、同店で販売されている製品を中心に、毎号テーマとなるブランドを取り上げている。今回はRCAが1950年代に開発した大型ホーンタイプのシステムを紹介したが、今号ではこのスピーカーと同時代のRCAの貴重な3極管パワーアンプ、MI-4256とプリアンプ、SV-1を紹介しよう。



MI-4256

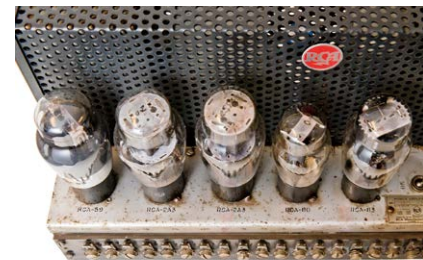
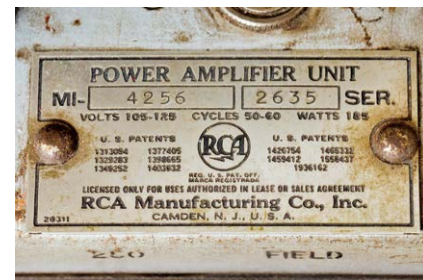
1920年代から始まったアメリカにおける映画産業の盛り上がりは各メーカーの熾烈な音響機器の開発競争になっていく。ニューヨークに本拠地を構えるRCA社とカリフォルニアにあるWestern Electric社はシェアを2分して争っていた。1930年代になると音響機器のレベルもかなり高くなり、現在でも銘機とされる音響機器が完成していく。そんな時代にRCAが自信作として開発していたシアター用アンプの一つがMI-4256であった。音色の生々しきで定評のある同社が先に開発した直熱3極管である2A3出力管を2本搭載した出力10Wクラスのパワーアンプとなる。

本文 田中伊佐資

製品解説 岡田圭司(アトリエJe-tee代表) 撮影 小林幹彦(彩紅舎)

第44回 RCA/2A3

1930年代までにRCAはビーム管の6L6、6V6、6F6など現在にいたるまで数多くのオーディオアンプに使われてきた真空管を開発していた。そして、これらを開発した数年後にさらなる音質の向上を目指して開発チームが作られ、直熱3極管の2A3が完成する。この2A3はその後に開発される有名なウエスタン社の300Bの基礎となった。これら直熱3極管の音質はすばらしく、まだに西(western Electric)の300B、東(RCA)の2A3としてオーディオファンを楽しませている。



RCA MI-4256

RCA社が1933年に高音質な音響アンプ用に開発した直熱3極管2A3は当時アメリカで音質の高い評価を得ていた。その数年後、これに対抗するWestern Electric社も直熱3極管に着手し有名な300Bを開発。シアター用に300Bを2本搭載した86型アンプの生産が始まる。RCAも負けじと、300Bより先に開発して好評を得ていた2A3を2本搭載したMI-4256パワーアンプをシアター用として発売した。搭載されている真空管は左から59、2A3、2A3、80、83の順。今回のアンプには入力段にバッファー用としてシャーシー右端に56真空管が搭載されている。

Retro-Future

古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ

RCA/MI-4256



RCA SV-1 / MI-12150

1950年代に入って、RCAがハイエンドコンシューマーとプロの現場でも使えるグレードのHiFi Fidelity Lineとして開発された唯一のプリアンプである。そのため業務用のMIナンバーも付けられている。通常RCAのパワーアンプはシアターやスタジオで使われるため専用のミキシングコンソールでコントロールされる。このため、コンシューマー的なプリアンプは開発されていなかった。ちなみにWestern Electricにはコンシューマー的なプリアンプは存在しない。とてもコンパクトなボディにメインボリューム、入力セレクター、高域、低域のコントロールのみのシンプルな構成で、パワーアンプの素質が余すことなくスピーカーに再現される。



アトリエJe-teeではパワーアンプ「MI-6264」専用のケースをデザイン。ホーンスピーカー「MI-6264」とテイストを合わせている

今回は前号で紹介、RCAが1950年代に開発した大型ホーンタイプのシステム「MI-6264」で試聴を行った



「アトリエJe-teeに入ったとき、すでにクリス・コナーの「バードランドの子守歌」が囁くような音量で流れていた。クリス・コナーは好きな歌手の一人で、わりと針を落とす機会が多い。だがいつも片面の途中でなんとなく飽きてしまい、本当のホントは好きではないのかもと思っていたりするのだが、こういうふうになりげなくたなびかせた声を聴くとやっぱりキュートだと思ってしまう。

で、その歌声を飛ばしているスピーカーが前回登場したRCA社のステレオ用スピーカーMI-6264。その取材のとき、岡田さんが「いやあ、残念。同じ時代にRCAが作っていた3極管の高級アンプがもうすぐ手に入るんだけど、間に合わなかった」と口惜しそうにしていた。

今回そのアンプであるプリのSV-1、パワーのMI-4256が入荷して、このスピーカーと組み合わせることが実現した。いきなり耳にしたクリス・コナーはすでにこのコンビの音で、ラスベガスのショーでひたすら音を遠くへ飛ばしていたスピーカーとは思えないジェントルな質感は、アンプの力が大きいのだろう。

ゆったりソファアに腰かけてまずは、フランク・シナトラの「夜のストレンジヤー」がかかった。いかにもアメリカ録音らしい豪華なサウンドだが、前回聴いたときはもっとモニターの、業務用っぽさを感じさせる音だった。こちらは柔らかなムードがある。

「パワーアンプで使っている2A3は品がいい真空管なんですよ」と岡田さんは言い、「エラ&ルイ」を続けた。

両者の声はなにも誇張した様子もなく、実にナチュラルに響く。トランペットは耳をつんざくようなやかましさをなく、気持ちよくリラクセスできる。だからといって、決して大人しいわけではなく、力強さは十分にある。RCAらしい質実剛健な音だ。

新しめの録音としてノラ・ジョーンズのデビュー盤が流れたとき、啾唝に「やっぱりこれは名録音だな」と思った。つまりは、ヴィンテージ・システムでもぜんぜんレトロ感満載の音ではない。といっても高解像度のハイファイではないから、僕が好きなトーンなのだ。

さらにいい雰囲気でも聴けたのはバッハのチェロ無伴奏ソロ。僕はクラシックファンではないので、その道に精通している人に見れば、リアルではない音と言いかもしれないが、しばらく聴いていたいと思わせる奏者の気遣いや説得力を感じさせた。

もう一度ヴォーカルものに戻って坂本九の「上を向いて歩こう」。自然と歌詞、曲、声をしみじみ噛み締めてしまう。途中の本人による口笛がまたいつそう心に染みる。音がどうしたといった感想が浮かばない。そういう心境になれる音こそが本当にいい音といえるのかもしれない。

レトロでもドハイファイでもない
ジェントルな質感はアンプの力である